

1 亡 霊

「戸をたたくのは誰」 「それはわたしよ 昔は美しかった  
でも 元通りになれるとは夢思えない  
暗い山査子の根元から戻って来て  
こうして戸をたたいているのです」

「しゃべっているのは誰」 「それはわたしよ 昔はきれいな声で 5  
空飛ぶ小鳥のさえずりのように言われ  
妖精エコーが川辺でこっそり<sup>ききみ</sup>聞耳立てるほどの声  
あのわたしが今 優しく話しかけているのです」

「真っ暗闇だ」 「そうよ そして寒いわ」  
「<sup>ひとけ</sup>人気の無い家だ」 「ああ でも もう戻れないわ」 10  
「見ていたもの触れていたものを わが目と唇が空しく求める」  
「それらは もはや あなたのものではないのです」

沈黙 ポーチにまだ<sup>かす</sup>幽かに  
星々の残炎が射している  
暗闇の中を 希望に<sup>う</sup>倦んだ手が 15  
鍵を <sup>かんぬき</sup> 門を 錠前を まさぐる

顔が覗き込む  
薄暗い夜が <sup>くう</sup>空なる混沌の中に輝く  
あるものは ただ <sup>ぼうぼく</sup> 茫漠たる悲しみ  
甘美なる欺瞞の跡形も無し 20